**カチュアの悲惨で無残な蹂躙物語**

　･･････古来より人類は、いつか世界が終わりを迎えると信じて疑わず、世代を超えて破滅的な終末論に取り憑かれてきた。

唱えられてきた終末論は多岐に及ぶ。地軸の転倒、氷河期の到来、火山の大噴火、疫病の流行、天体の衝突、さらには外宇宙からの侵略者など、世界に終焉をもたらす要素は無数にあるとされ、終末論が唱えられるつど、人々は恐れ慄き、怯え震えて、狂ったように神に祈りを捧げてその「刻」が来ないことを願ってやまなかった。だが、結局のところ、世界に破滅をもたらした原因は、自然災害の発生でもなければ外的要因でもなく、他ならぬ人類自身の手によって「ソレ」はもたらされたのであった。

　熱核兵器による応酬――通称「最終戦争」の勃発は、大国の侵略戦争と宗教問題に端を発した世界戦争の総称である。最初は地域を限定した戦争も、怒りと憎しみによって徐々に過激化してゆくと、民族や民族、さらには経済的な要因も加わって、最終的に核ミサイルの発射にまでいたるのだった。

発射された戦術・戦略核ミサイルは数千発に及び、豪雨となって世界中に降り注いだ。都市という都市は破壊され、一度に五〇億という人間が一瞬で死にいたった時、人類の愚かさを嘆く声は阿鼻叫喚となっていたるところで聞こえたが、やがて静かになった。核の冬の冬が訪れたからである。おびただしい量の灰が全地球規模で太陽光を遮った結果、動物も、植物も、海洋生物も、さらには昆虫すらも死滅して、地球は文字通りの意味で死の星に変わってしまったのだった。

　最終戦争後の地球には、核兵器による即死を免れた人々がなおも二五億人ほど生き残っていたが、飢えと、寒さと、病の蔓延と、なにより放射能汚染によって緩慢に死に絶えてゆき、戦後の三年間でさらに二〇億人が死者の列に加わった。この時、人々は神に救いを求めたが、全能神が降臨することもなければ、悪魔が手を差し伸べることもなく、空から降るのは黒い雨と灰ばかりであった。

終末世界の景色は荒涼としていることこのうえない。地表はおびただしい数の白骨と死骸で埋め尽くされ、廃墟はさながら朽ちた墓標の群れと化し、灰が積もり、汚れた雪が積もり、暗灰色に染まった世界に緑の息吹は感じられず、その光景は陰惨を極め、まだ辛うじて生命を維持している者たちは、地獄と化した世界に絶望を抱かずにはいられなかった。

　だが、地上がこのような状況にいたるなか、地下で安寧と享楽の生活を送る者たちがいた。地下のシェルターに逃げ込んで、核の地獄をやり過ごしていた者たちである。それは旧世界の富豪たち――いわゆる資本主義の支配者たちであった。

　彼ら資本主義の支配者たちは、世界がいつか終焉を迎えることを真剣に考え、その時に備えて秘密裏に準備を進めていた。そのひとつが、地下シェルターの建設である。彼らは鋼鉄製の分厚い扉と、コンクリートの頑強な壁と、空気浄化装置と、強力な私兵に護られた広大な地下シェルターを世界のいたるところに準備して、核戦争の勃発と共にそこに逃げ込んだのであった。

　彼らが築いた地下シェルターは、まさに地下の楽園であった。そこに逃げ込んだ者たちは、水にも、食料にも、酒にも女にも不自由することなく過ごすことができ、地上が地獄と化すなか、それを肴に、平和と快楽を享受し続けたのであった。

　彼らが再び地上に姿を現したのは、最終戦争が終わって三年後のことであった。備蓄していた水や食料が尽きたからではない。かつてのように世界を支配するため、まるで邪神の復活のごとく地下より這い出てきた旧世界の富裕層たちは、隠匿していた知識と技術、ため込んでいた金属資産、植物の種子、匿っていた家畜、そして重火器で武装した私兵たちを武器として、地上で生き残っていた人々を支配下に置くことに成功したのだった。

　自分たちにとって有利な世界――資本主義の理想郷を、もう一度、築き直すために。

　かくして世界には、幾つもの小規模な集団が形成されることになる。それは村や町といった類のものではなく、決して覆ることがない厳然とした格差と階級によって成立したコミュニティであった。

　持つ者が、持たざる者の生命も人生も支配する暗黒時代の理想郷――倫理も、道徳も、戒めの教えも、弱者を守る法律もない強者の理想郷が、世界の各地の点々と出現したのであった。

この物語は、そんな暗黒時代に誕生した、とあるコミュニティにおける日常を綴った物語である。

　　　　　＊

　ファーガソン・コミュニティは、その名が示す通りファーガソン一族によって支配された新世界コミュニティの名称である。

　コミュニティがある場所は、アパラチア山脈の麓――旧世界の地図で表記するならば、カナダとアメリカの国境に位置する辺境の地だ。戦略的な要衝が乏しかったこの場所は、東西冷戦時代に核攻撃による被害を免れると予測されていたため、ファーガソン一族は最終戦争が勃発する二〇年も前からこの地に地下シェルターを築いていたのだった。

　ファーガソン一族は、旧世界において、いわゆるポルノ産業によって財を成した一族である。娼館運営、バー、パブ、クラブの経営、アダルト動画や映画の作成と配信、性玩具の販売、富裕層や権力者への高級娼婦の斡旋、大麻や合法麻薬、媚薬、精力増強剤などの取り引き、さらには人身売買によって莫大な財を築いた。雇用していた娼婦やストリッパー、女優、モデル、タレントは全世界で一万人を超えていたとされ、一族からも女優や男優を何人も輩出している。アメリカとヨーロッパを中心に活動していたことで、各国の政界、財界、官界、スポーツ界などとも強い繋がりを持っており、その強いネットワークにより核兵器使用に関する情報をいち早く掴んでいた。最終戦争勃発時には選りすぐりの美女や美少女たちと共に地下シェルターに避難して、彼女たちを私兵にあてがうことで忠誠を維持し、長い核の冬を乗り切った。

彼らが地上への再進出を決めたのは、放射能汚染による危険が薄らいだことを察したからである。また、彼らが潜む地下シェルターの付近に生存者たちによる集落が形成されていたことも、地上への復活を後押しした。労働力というモノは、いつの時代も必要不可欠なモノである。特に機械による産業の再興が望めない以上、人力は、宝石のように貴重なモノであった。

ファーガソン一族に忠誠を誓う私兵の数は五〇人に満たない。正確には四七人しかいなかったが、彼らは強力な重火器で武装しており、さらには疲弊していない強靭な肉体を有していた。ゆえに、ファーガソン一族の地上再進出は、かつてマヤやインカを滅ぼしたコンキスタドールたちの再来となった。

　生存者たちにとってはたまったものではなかった。悲惨極まりない戦争を息抜き、寒くて長い冬を耐え凌ぎ、支え合い、協力しながら、苦労して大地を除染して、ようやく再出発の兆しが見えてきた矢先、暴力的な支配者が現れて、中世のような農奴階級に堕とされてしまったのだから。

「おお神よッ、あなたはどうしてそこまで無慈悲なのですかッッ！」

と、ファーガソン一族の農奴にされた生存者のひとりは悲痛な声で天を仰いだが、最終戦争の時でさえ、神は降臨もしなければ救いの手を差し伸べなかったのだから、いまさらなにを言っても無駄というものである。いっそのこと、悪魔か邪神に救いを求めた方がマシだったかもしれないが、結局のところ、邪悪さで人類に勝るモノは存在せず、いつの時代でも、人類という存在こそ人類にとって最大の害悪であって、人類の愚かさというモノは、世界が終わっても不変であるようだった。

　ファーガソン一派による襲撃によって、周辺四つの集落が彼らの支配下に置かれた。四つの集落を合計した人口五五〇人ほどで、そのうち、八五人が最初の襲撃の時に殺されて、さらにその後の「見せしめ」で四〇人が殺された。この「見せしめ」による処刑は残虐を極め、住民たちの抵抗の意思は石をぶつけられたガラスのごとく粉々に砕け散ってしまったのだった。かくして形成された「ファーガソン・コミュニティ」では、ファーガソン一族による支配が絶対とされ、そこでの隷属を強いられた人々は、彼らに運命も、人生も、生命すらも握られてしまったのだった。

　ファーガソン・コミュニティでは、そこに住む全ての者たちが、ファーガソン一族に絶対的な忠誠を誓わされ、彼らに奉仕することを強要された。

それは食料の生産であり、身の回りの世話であり、そして性的奉仕の強要であった。特に最後の項目は、「性」産業によって富み栄えてきたファーガソン一族らしい事項であるといえよう。ファーガソン一族には男女を問わず性豪の者が多くおり、彼らは新鮮な「肉」を特に好んだ。「処女税」や「童貞税」なるモノの導入は、欲望と悪意に満ちた象徴のような制度であるといえる。

またコミュニティでは、身体や知能に障害を持った者は生存を認めないものとされ、産まれた場合は即座に間引かれ、後天的に発症した者であっても、よほど有益と見なされなければ、有無をいわさず処理された。この決まりは、少ない資源を役立たずに分配しないためであるとされたが、間引きや処理に娯楽的要素が加わった時、この決まりはこのうえない残酷な光景を醸し出すことになる。

　ファーガソン一族による支配初期の段階では、まだ抵抗の意思を示す者たちが幾人かいた。が、彼らの多くは蜂起に失敗し、ことごとく捕らえられ、酷い拷問を受けた挙げ句、惨たらしく殺されていった。そして一〇年が過ぎる頃には、誰もファーガソン一族による支配に逆らわなくなり、圧政を受けても従うことを当然と考えるようになってしまったのであった。

　だが、それでもなお、反逆の炎は決して消えることなく、なおもくすぶり続けていたのである。水面下の、見えないところで･･････。

　　　　　＊

　カチュア・トゥレントには、コミュニティを支配するファーガソン一族に反逆するに充分過ぎる理由が存在していた。

　世が世であれば、カチュア・トゥレントは薔薇色の人生を歩んでいるはずの娘である。ハーバード大学を首席で卒業するほど優秀な頭脳を持った父親と、ミス・ユニバース代表に選ばれるほど美しい容姿と抜群のプロポーションを誇る母親のもとに生を受けた彼女は、産まれた時からモデルとしてのキャリアを進め、四歳になる頃には稀代の美幼女として全米の注目を集める存在となっていた。アメリカ全土で開催される数々の美少女コンテストで優勝したことから「ジョンベネの再来」と揶揄されることもあったが、それでもカチュアの美貌には非の打ち所がなく、彼女を知る者は、誰もが将来、カチュアが世界的スターになると信じて疑わなかった。

　だが、最終戦争が勃発したことで、他の多くの者たちと同様に、彼女の将来は暗く閉ざされてしまったのだった。

　核攻撃による即死は免れたものの、住む場所を失った彼女は、両親に連れられて他の避難者たちと共に徒歩で北上し、放射能による脅威が比較的少ないアパラチア山脈の麓に辿り着いた。幸運にも、そこにはアーミッシュの小さな集落があって、カチュアら避難民たちは、彼らの助けを借りて第二の人生をスタートさせたのだった。

　不幸だったのは、彼女たちが住みついたすぐ近くに、ファーガソン一族が潜む地下シェルターがあったことである。邪神の復活のごとく現れたファーガソン一族は、瞬く間に人々を制圧して、彼らを自分たちの支配下に置いた。

　この時、カチュアの父親を含め、一部の者たちは勇敢に抵抗したのだが、強力な重火器で武装したファーガソン一族の私兵に勝てるわけがなかった。抵抗虚しく敗れた男たちは、捕まり、「見せしめ」として、妻や子どもたちの目の前で惨たらしく殺された。顔を殴られ、腹を蹴られ、眼球にタバコの火を押し付けられて、軍用ナイフで生きたまま局部を切り取られた後、縛り首にされて吊るされて、その死体に尿をかけられたのである。カチュアは、その悪夢のような有り様を、母親と共に最前列で見せつけられたのだった。

　すでにこれだけで、カチュアがファーガソン一族に怒りを覚えるには充分すぎたが、彼女の反逆の意思を確固たるものにしたのは、その二年後に起こった出来事だった。

　父親が殺されて二か月後、妊娠していたカチュアの母親が出産した。生まれた赤ん坊は男の子だった。カチュアは喜び、弟を溺愛した。暇があれば片時も離れず一緒に過ごし、母親以上の愛を注いで弟を大切に育てたが、その二年後、悲劇が襲う。弟が、視力を失ってしまったのだ。病気によるものか、それとも放射能による影響かは定かではなかったが、ファーガソン・コミュニティに障害を患った者が生きれる場所はない。先天的であれ、後天的であれ、障害の発覚は、即、死に繋がる。これまでがそうだったように、カチュアの弟もこの非道なる運命から逃れることはできなかった。

　障碍者の公開処分は、反逆者や犯罪者に対する公開処刑と同様に、娯楽的な要素を多分に含んでいる。対象をより残酷に、より無惨に、より派手に殺すことによって住民に陰鬱な愉悦を与え、それがしいては体制の維持に繋がるからだ。むろん、処分される側からすればたまったものではないが。

　取り上げられた弟は、カチュアや母親の他、コミュニティの住民たちが見ている目の前で、頭を岩に打ちつけられて殺された。足を掴まれた状態でフルスイングされたのだ。爆ぜる音がして、飛び散った脳ミソがカチュアの頬に付着した。現実を受け入れることができず、カチュアが呆然としていた時、その耳に届いたのは、弟を殺した男が放った嗤い声だった。

「ふはははは。いい音だ。気持ちがいい！　最高だ！　こんなことをしても罪にならないとは、なんといい時代になったことか。ふははははは！」

そう嗤ったのは、コミュニティの支配者にして、ファーガソン一族の当代当主ガレドラ・ファーガソンであった。彼はこの時、三五歳。屈強な体格の男で、背も高いし顔も嶮しい。しかし、嗤うその顔は、実年齢よりも遥かに幼く見え、まるで子どもが虫を殺す時に見せるような、残酷な無邪気さを醸し出していた。

　カチュアは、とめどなく溢れる涙をこらえながら、歯を食いしばり、邪悪に嗤うガレドラを睨みつけていた。憤怒と憎悪の呪詛を心のなかで叫びながら。

（殺してやる･･････絶対ッ、絶対にッッ、絶っ対に殺してやるぅぅぅぅぅッッッ！）

　その日から、カチュアはガレドラを殺すことを目的として生きるようになった。

　すでに承知の通り、ファーガソン・コミュニティには「処女税」というものが存在している。これは中世に存在した「初夜権」を模したもので、未経験の女性が、コミュニティの支配者であるファーガソン一族の男に初体験を献上するというシステムである。容姿の美しさやスタイルによって宛がわれる順位が決定するため、必然的にもっとも容姿端麗でスタイル抜群の女性が当主であるガレドラの相手をすることになるのだ。ゆえに、カチュアは自らの美を磨きに磨きあげた。

　貧しい暮らしのなか、カチュアは食べる物に気を使い、髪や肌や歯の手入れを怠らず、乳房や尻が大きくなるよう自分で揉みほぐして刺激を与えた。遺伝的な素質も手伝って、その努力は身を結んだ。カチュアは、一七歳になる頃には絶世と称されるほどの美少女となっており、コミュニティでは異性同性問わず誰もが一目置く存在になっていたのだ。

　カチュアは、容姿が端麗なだけでなく、肌は透き通るように白くて美しく、髪は長い豪奢な金髪で、細く華奢な手足はすらりとしており、白い歯は並びもよく、瞳はサファイアのように美しかった。背丈はやや低いものの、その分、乳房は大きく、お尻の肉付きも素晴らしい。みすぼらしい身なりや姿の女性が多いコミュニティのなかで、カチュアの存在は特段の異質さを醸し出しており、それはまるで石ころの山で輝く大粒の宝石のようであった。ゆえに、カチュアがガレドラの相手をすることになったのは、もはや必然という他なかった。

　――その夜、「税」を支払うため、カチュアはガレドラの館に招かれた。石造りの館で、館のどこかに恐ろしい拷問部屋があると噂されていた。コミュニティで粗相をした者はその部屋に連れ込まれ、そこで酷い拷問を受けて殺されるのだと言われていた。事実、館に連れて行かれた後、永遠に姿を消す者は少なくなかった。

　湯浴みをして身体を綺麗にした後、カチュアは薄いガウンのような服に身を包み、ガレドラが待つ部屋へと通された。この時、カチュアは凶器や毒物を隠し持っていないか入念なチェックを受けたのだが、その際、カチュアは内心でせせら笑っていた。

（ふん、なんて臆病なのかしら。自分は平気で他人の命を奪う癖に、自分は命を失うことが恐ろしいなんて！　まるで怯えふためくネズミみたいで滑稽だわ。それだけ自分たちが憎まれて恨まれている自覚があるのなら、最初から悪政なんか敷かなければいいものを！）

もちろん、どれだけ入念に身体を調べられても、凶器や毒物が出てくるはずがなかった。それもそのはずだ。カチュアは最初から、武器や毒に頼るつもりがなかったからだ。

　ガレドラを殺すため、カチュアが「武器」に選んだモノは、自らの歯だった。健康な歯であれば、舌でも男性器でも噛み千切ることができる。それは、獣を使ってすでに実証済みだった。だが、それでは生温い。それに、惨たらしくもない。ゆえに、カチュアはガレドラを辱めて殺すため、彼を殺す方法として睾丸を噛み潰してやるつもりだった。そのために、今日の今日まで人知れず牙を研ぎ澄ましてきたのだから。

　･･････だが、カチュアの目的は、彼女が想像もしなかった理由によって阻まれてしまう。そのことを、この時はまだ、カチュアは知る由もなかった。

　　　　　＊

　･･････閉ざされた薄暗い部屋の中に、怪鳥のような女の叫喚が木霊し響いたのは、月が高く昇り、夜も深くなった頃である。

「うぎゃああああああああぁぁあぁぁぁあぁあぁぁぁぁぁッッ！　があッ、あぎぎッッ、熱い熱いッッ、ひぎいぃいぃぃぃいぃぃぃぃいぃぃぃいぃぃッッッ！　あづいいぃぃいぃいぃぃいぃぃいぃぃいぃぃぃいぃぃッッッ！　うぎゃああああぁああぁああぁぁぁぁあぁあぁあぁあぁぁぁぁあぁぁぁぁッッッッ！」

それは痛みと苦しみに満ちた絶叫だった。その音質からして、酷いことをされているに違いない。聞いただけでそう判別できてしまうほど、薄暗い部屋の中に響く女の悲鳴は苦痛に満ちていた。

　実際、叫び声の主は酷いことをされていた。叫び声の主は若い娘だったが、彼女は一糸まとわぬ裸にされた状態で、腕と脚を、折り曲げられた状態で縛られており、身動きが取れない体勢で冷たい石畳の床に転がされていた。その白い裸体には、背中や太腿、腹部、お尻、そして乳房など、身体のいたるところに様々な傷が無数の痕となって刻まれており、すでに相当な暴行を受けていることが伺い知れたが、彼女に対する暴行は現在も継続中であり、背中や尻を中心に、無数の赤い点々で体表を覆われていた。

これは、蝋である。熔けた蝋の残骸である。彼女はいま、傷ついた白い裸体に灼熱の雨の浴びている最中であった。

頭上から、愉悦めいた男の声がした。

「ぐふふふふ。いいぞ、いい声だ。股間に響く実にいい哭き声だ。ぐふははははは！」

そう邪悪な声を発したのは、若い男ではなかった。すでに人生半ばに達したような中年の男で、服を着ていないその身体は、屈強で、全身が盛り上がるような筋肉によって構成されていた。顔は巌のような面持ちで、腕が太く、脚も太く、そして背が高いため、床に転がる女を見下ろすその姿は、まるでおとぎ話に登場するオークのようでもあった。丸出しの股間部分には、三本目の脚かと見紛うほど巨大なイツモツがぶら下がっているのだが、これはまだ勃っていなかった。男の名はガレドラ・ファーガソンという。ファーガソン・コミュニティの支配者にして、ファーガソン一族の当代当主を務める男だ。

「だが、まだだ。まだまだ足りん。まだまだ全然、俺のペニスが反応しないぞ。俺のペニスが勃つよう、もっといい声で哭いてくれ。さぁ、さぁさぁさぁッ！」

そう言ってガレドラは、愉悦の笑みを浮かべながら、手にしている太い蝋燭を傾けた。すると、熔けて溜まっていた真っ赤な蝋が、まるで大粒の雨のようにボタボタと降り注いで、芋虫のように床で悶える娘の尻や背中に降りかかった。

ボタッ、ボタボタボタッ、ボタタタタタ･･････。

じゅっ、じゅぅぅぅっ、じゅじゅっ、じゅぅぅうぅっぅううぅぅ･･････っっっ。

蝋が滴り落ちると同時に皮膚が焼ける音がして、床に転がる娘がカッと目を見開いた。

「うぎゃあああああああああああああああああああああああああああああッッッッ！　あ、熱いッッ、熱いあついッッ、あづいいいぃぃぃぃいいぃぃぃぃいいいぃぃいぃぃぃッッッ！　や、灼けるッッ、かかか身体がッッ、や、灼けッッ、ぎゃあああぁぁぁぁああぁぁああぁぁあぁぁあぁぁぁぁあぁぁぁぁああぁぁぁあぁぁあぁッッッッ！」

強い悲鳴をあげながら、冷たい石畳のうえで悶え苦しむ娘。しかし、手足を折り曲げられた状態で縛られているため、思うように身体を動かすことができず、そのまま成す術なく蝋を浴びるしかない状態だ。

　そんな娘を見下ろしながら、ガレドラはギラギラした目を怪しく輝かせながら大声で嗤った。

「ぐはははははは。いいぞ、いい声だ。その調子でもっと哭け。哭き喚け。そらそらそら」

そう言ってガレドラは、悶える娘の背中を大きな足で踏みつけると、さらに赤い蝋燭を傾けて、溶けて溜まっていたドロドロした蝋を滴らせた。大量の蝋がまた盛大に降り注いで、娘の白いでっぷりとした尻に降りかかった。

ボタボタッ、ボタタタッ、ボタボタボタタタタタタ･･････。

じゅっ、じゅうぅぅぅぅっ、じゅうううぅうぅぅぅぅぅ･･････っっっ。

灼熱の赤い点々が、綺麗で立派な尻を赤色で彩ってゆく。ドロッと付着して、皮膚を焼いてゆく。蝋で尻を焼かれたカチュア・トゥレントは、目を剥きながら口を大きく開け拡げ、肺を空にする勢いで悲鳴をあげた。

「ぐぎゃああああああああああああああああああああああああああああああッッッ！　ああああ熱いッッ！　熱い熱い熱いいぃいぃぃぃいぃぃいぃぃいいぃぃいぃぃぃぃッッッッ！　お尻がッッ、お尻が灼けるッッ、おおおおお尻があぁぁぁああぁぁぁあぁぁあぁぁぁああぁぁぁぁぁぁッッッ！　うがああああぁぁぁあぁぁぁぁあぁぁああぁぁあぁぁあぁぁぁぁああぁぁぁッッッ！　や、やべでッッ、やべでやべでやべでえぇぇえぇぇぇえぇぇぇえぇぇえぇぇぇぇぇえぇぇええええぇぇッッッ！　ぐぎゃああぁあぁあぁぁあぁあぁあぁぁあああぁぁぁあぁぁぁぁあぁぁあぁぁぁぁぁぁッッッッ！　あづいッッ、熱いあづい熱いいぃいぃいいぃぃぃぃぃいぃぃいぃぃぃいぃぃぃいぃぃッッッッ！　んぎゃああぁあぁぁぁあぁぁああぁぁぁああぁぁぁぁあぁぁぁあぁああぁぁぁあぁぁあぁぁぁッッッッッ！」

　まるで釣り上げられた魚のように、四肢を拘束された身体をびくんびくんと痙攣させながら、尻に降り注ぐ灼熱の雨からどうにか逃れようと、ジタバタと暴れ狂うカチュア。しかし背中を強い力でもって踏みつけられているため、逃げたくても逃げ出すことができない。

「うははははははッッ！　逃げたいか？　逃げたいのだな？　だが、ダメだ。逃がさん。なにせ、俺のペニスはまだ勃っていないからなぁ。俺のペニスが勃起するようもっと哭けッッ、哭いて哭いて泣き喚けッッ！　そらっ、そらっ、そらッッ！」

　ボタボタボタッ、ボタタタタタタタタタタタ･･････。

　じゅじゅっ、じゅぅうぅぅぅっ、じゅじゅぅうぅうぅぅ･･････っっっ。

　さらに大量の蝋が降り注ぎ、カチュアの尻を真っ赤にしてゆく。

　カチュアが大声で絶叫したのはいうまでもない。

「うぎゃああああああああああああああああぁあぁあぁぁあぁあぁぁあぁぁぁぁああぁぁあぁぁぁああぁぁぁあぁぁぁぁあぁぁぁぁあぁぁぁぁぁあぁぁあぁぁあッッッッ！　熱い熱いッッ、あづいいぃいぃぃぃいぃぃいいぃぃいぃぃぃぃいぃいぃぃぃいぃぃいぃぃぃぃぃぃいぃぃぃぃッッッ！　灼けッ、灼けるッッ、灼げるううぅぅううぅううぅぅぅぅうぅぅぅぅうぅぅぅぅうぅうぅぅうぅうぅッッッ！　んぎゃああああぁああぁぁあぁぁぁぁあぁぁぁあぁぁぁぁぁあぁぁぁぁぁぁあぁぁぁぁあぁぁぁぁぁぁぁッッッッッ！」

身体を足で抑えられているため身動きすることもできず、降り注ぐ大量の蝋に尻を焼かれ続けるカチュア。熱い蝋が尻に付着するたびに、強い激痛が表皮を走り、そのつど、悲鳴をあげながら、びくんびくんと身体を痙攣させる。肉づきのよい大きなお尻のほとんどが、赤い蝋に覆われてしまっても、灼熱の雨はまだまだ止みそうになかった。

（ぐ、ぐぎいぃいぃいぃぃいぃぃぃぃ･･････！　な、なんでッッ、ど、どうして――こんな、ことに･･････！）

大量の蝋で身を灼かれながら、目を剥き、歯を食いしばり、身体をビクビクと痙攣させながら、カチュアは呻くような声で自問した。頭の中で。自問せざるを得なかったから。

　　　　　　　　　　･･････続きは本編でお愉しみください。